

	<p align="center"><b>福島県 田村市船引町</b>  <b>大河原 多津子さん</b>  <b>有機農業者、人形劇団“赤いトマト”主催</b></p>	<p align="center"><b>熊本県 熊本市</b>  <b>吉田 祐一さん</b>  <b>一般社団法人 Arts and Sports for Everyone</b></p>
<p>話し手プロフィール</p>	<p>福島原発事故による放射能被害を受け、そこで起こったさまざまな事を自作の人形劇を通じて、現代の私達すべてに問いかけています。                  また、“有機農業者々人形劇”(ご主人との共著)、“思いたっちゃんなら吉日”でも、ご自身の経験を発信しています。</p>	<p>熊本地震を受け、障がい者スポーツ「ポッチャ」を使った復興支援活動に取り組んでいる団体代表                  高校教諭、障がいを持つお子さんをお持ち</p>
<p>位置、地勢</p>		
<p>災害概要</p>	<p>田村市 船引町あたり 平成23年3月11日14時46分 震度 5強(マグニチュード9.0)                  平成23年3月11日15時21～51分 岩手、宮城、福島沿岸地域に8m以上の大津波襲来                  平成23年3月12日福島第1原発1号機水素爆発、3月14日、福島第1原発3号機水素爆発                  3月15日、福島第1原発4号機爆発、火災発生(自然鎮火)</p>	<p>前震 平成28年4月14日 21時26分頃 震度7(マグニチュード6.5)                  本震 平成28年4月16日 1時25分頃 震度7(マグニチュード7.3)                  他、前震から4月16日までに、震度6弱以上 5回発生(マグニチュード5.4以上)</p>
<p>被害</p>	<p>放射能汚染、風評被害</p>	<p>家屋全壊、半壊、一部損壊、避難生活</p>
<p>被災者の目から見たこと、経験、問題点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災の地震、津波の被害自体はほとんど被害がなかったが、2011年3月15日に空間放射能警報機(チェルノブイリ原発事故後に自宅に設置していた)のアラームがなり、パニックになった。</li> <li>有機農家なので農業を再開したかったが、福島県の放射能検査は、“基準内”かどうかは知らされず、実際の数値が分からないので、却って不安だった。</li> <li>息さんが大学で検査技術を学んでいたため、食品放射能測定器を提供いただいたこともあり、市民測定所として発足し、そこで販売する野菜や果物をすべて検査し、数値表示して販売することに至った。</li> <li>放射能汚染は地形、天候により大きく変化するが、チェルノブイリからの経験からしても、日本全土が汚染されている可能性は高い。特に隣県の北関東も汚染が大きかったと推測されるが、食品の放射能検査はあまりされてこなかった。</li> <li>山の中は一切除染はされていないため、放射性物質が蓄積している。また、野生動物の体内にも高濃度の汚染が考えられ、動物による放射性物質拡散も考えられる。</li> <li>オリンピック開催前に放射線モニタリングポストの撤去が進んでいる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>震度7の前震、本震が夜間にあり、また、3日間に震度6弱以上の地震が5回発生するなど、大きな地震が繰り返されたことから、自宅が損壊を免れていても、自宅で寝ることは不安で出来なかった。そのため、多くの人が車中避難していた。</li> <li>避難の時には備蓄しておいたり、準備してあるものは持ち出せなかった。</li> <li>避難所は、主に学校等が使用され、学校関係者が避難所運営も担っていた。よって、避難所により、被災者の状況はまちまちだった。</li> <li>避難所は、指定避難所と自主避難所があり、自主避難所には備蓄や物資の配給はない。</li> <li>学校や職場の関係上、他の広域避難は難しかった。</li> <li>現在の避難所では、障がい者は一般の人と同じ避難所生活をおくるのはむずかしい。しかし、一般の中に共生できる避難所作りが必要。</li> <li>福祉避難所があることが周知されていなかった。</li> <li>外国人、高齢者、障がい者など、社会的弱者への情報も含め、対応が全くなかった。</li> <li>SNSで情報拡散されていたが、物資が滞る、必要なのに渡らない、すでに需要状況が変わっているなど、情報コントロールができていず、混乱していた。</li> <li>避難所毎に上手に若者たちとの協力関係を作れるかで、避難所の様子が全く違った。</li> <li>若い人の力が発揮できている所は、良い雰囲気、一方年配者が中心のところは、あまりよくなかった。</li> <li>ポッチャにより、避難所の雰囲気が変わった。</li> <li>災害が起こったことで、地域の結束は強くなった。</li> </ul>
<p>提案、展望</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>たとえ休止中の原発でも、1度事故が起きたら日本国内全土に汚染の可能性があるため、モニタリングポスト、アラームを日本各所に設置すべき。</li> <li>日本国内全土で食品の放射能検査体制を整えておくべき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特に若い世代との連携もてるような、地域に災害NPOを作り、日ごろから、地域の連携を強めておく。</li> <li>一般の人と社会的弱者である障がい者、高齢者、外国人が共生できる避難所が必要</li> <li>これからも障がい者スポーツ「ポッチャ」を使った復興支援活動に取り組んでいく。</li> </ul>